2022- July
No.124

桜建会報 OKEN

contents

創立100周年記念 座談会

特集◎一世紀を超えて、これからを展望する

その３●短期大学部建築・生活デザイン学科 ――― 2
小石川正男 × 羽入敏樹 × 酒句教明 × 矢代眞己
その４●生産工学部建築工学科 ――― 12
浅野平八 × 塩川博義 × 永井香織 × 北野幸樹 × 亀井靖子 × 下村修一

斎藤賞・加藤賞・桜建賞2021年度受賞作品紹介 ――― 22
研究室紹介 ――― 32
事務局だより ――― 33
学部ニュース ――― 34
桜建賞受賞作品(設計)紹介 ――― 36

短期大学部のある船橋校舎。キャンパスの南東部に位置する９号館に、建築･生活デザイン学科の研究室や講義室、実習室が集まっている。

生産工学部津田沼校舎。正門から校舎までのアプローチには、大きく育った樹木が並び、瑞々しく濃い緑陰をつくっている。上のイオニア式オーダーは、日本橋の東京銀行本店から 1975 年山口廣名誉教授（故人）が譲り受けたもの。

日本大学桜門建築会
http://www.okenkai.jp/

創立100周年記念座談会
特集◎ 一世紀を超えて、これからを展望する

その３◉短期大学部建築・生活デザイン学科

２＋２＋２、ステップを刻んで「未来」の幅を広げられる短大へ
改革と理想を携えて

2022年1月19日、日本大学船橋校舎９号館輪講室にて

出席者／ 小石川正男（元教授・建築計画）
羽入敏樹（教授・建築環境）
酒句教明（教授・建築構造）
司会・矢代眞己（教授・建築史）

学生の居場所を自らつくった短期大学部

矢代／本日は、長年短大で教育に携わられた元学科長・小石川正男先生にお出でいただきましたので、まずは先生の大学入学当時の短大の雰囲気を話していただけますか。

小石川／1969年の入学当時は習志野校舎でしたが、66年までは、校舎は津田沼（現生産工学部）だった。その頃の短大は、まず研究室というのがなかった。だから短大の学生の居場所が大学の中になかったんです。なので、学生たち自身で研究会というものを組織して、自分たちの居場所をつくったんです。そこに集まって情報の共有をしながら勉強し合い、先輩とのつながりもそこでつくっていきました。同じような境遇の学生同士で触発し合って育ってきました。私自身のことを考えても、先生に教わったというより、先輩たちにいろいろ教えてもらったことをよく覚えています。

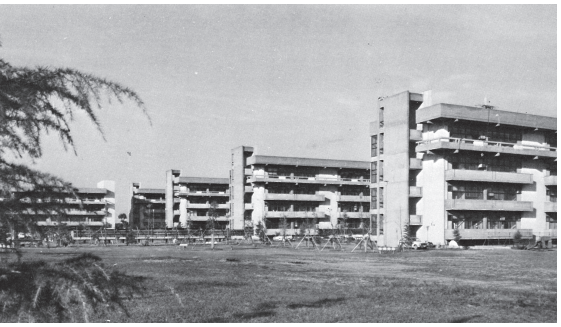
それから地方からきた学生も多く、だれかの下宿に集まって、寝泊りしたり、酒盛りしたり、にぎやかでした。それが当たり前だと思っていた。当時のキャンパスはコンクリートの箱のような建物が並んでいるだけで、殺風景。大学紛争の余波も少し残っていて、学生も全体的に逞しかった。勉強もしたけど余暇もあった。今とはずいぶん雰囲気は違います。昔はいい意味で放置されていたのです。

矢代／その研究会は、いくつぐらいあったのですか。

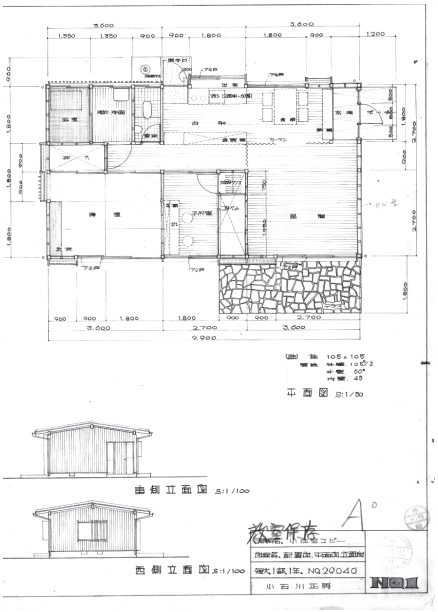
小石川／構造力学研究会、建築材料研究会、私がつくったのが建築デザイン研究会。それから建築計画研究会、土質力学研究会とか、５つくらいあったかな。学生は400人くらいいましたが、全員が研究会に入っていたわけではありません。友だち同士がコアになって、輪が広がっていった。

矢代／新入生は必ずどこかの研究会に入らなくてもいいのですか。

小石川／オフィシャルなものじゃないから、別に入らなくてもよかっ



1970年頃の習志野校舎。コンクリート打ち放し仕上げで、平行に配置された箱形の棟が連なっていた。（出典／1971年度短大パンフレット）



教室保存の図面／短大製図室倉庫に保管されていた小石川先生の短大1年生時（1969年7月提出）の住宅図面。赤字で「教室保存A°」と記されている

Koishikawa Masao
1948年東京都生まれ。71年日大短期大学部建設学科卒業。74年同理工学部建築学科卒業、同年より同短期大学部の副手に入り、2000年より教授、その後、建築コース主任、学科長、一般教育主任、短大次長を歴任。07年文科省採択特色ＧＰ取組代表者。11年文科省短期大学教育功労者表彰。

た。学生生活を送るうちに、じわり、じわり、人を増やしていった。寺子屋みたいなものでしたよね。そこから「研究室」みたいなものが芽生えていくんです。

羽入／研究室のない頃というのがあったんですね。研究会の人たちは、どこで活動したんですか。

小石川／下宿だよ。（笑）

酒句／今の話を聞くと、大学側に研究室がないとしたら、先生に会うのは、高校みたいに職員室に来るような感覚だったんですか。

小石川／たぶん、駿河台に研究室をもっていたのが松井嘉孝先生とか、細谷隆二先生、金平八郎先生。授業のある日しかこちらに来ない。ですから、学生は授業時間以外は放置状態でした。

酒句／研究室での活動は、どのように始まったのですか。

矢代／私が在学した頃はありませんでした。専任となった時には、学科として取り組んでいました。

小石川／少しずつカリキュラムに盛り込んでいきました。後で話に出ると思いますが、「特色ＧＰ」の採択を受けて、改定したカリキュラムでしっかりと制度化しました。昔のカリキュラムはミニ理工学部のような構成で、卒研着手までの３年間の授業を２年間に圧縮したようなかたちでした。構造系の科目が圧倒的に多いし、しかも必修で、ほんとにたいへん。構力Ⅰ、構力Ⅱ、応力の３力（リキ）。それに、計画でもなんでも必修だったんですよ。だから、卒業判定では、必修科目でみんなひっかかるんです。総単位数ではなくて。

羽入／それでは、卒業できない学生がたくさんいたのですか。

小石川／いやいや、再試験制度があって、再試験をします。みんなそこで勉強するわけ。再試験で100点をとる学生もいて、短期間に集中すればできるんですよ。

酒句／基礎学力はあったんですね。

小石川／そう思います。そんな思い出が印象に残っています。

矢代／その中で、小嶋勝衛先生とか、若色峰郎先生、関口克明先生、坪山幸王先生、川村政史先生、若井正一先生たちを輩出してきたわけです。すごいですよね。

酒句／その頃短大の卒業生の進路は、どうだったのですか。

小石川／200名のうちほとんどが就職です。最初から理工学部へ編入したいと思う人はいたんでしょうけど、間口はそんなに広くない。でも、そういう人は優秀で、理工学部でもトップレベル。編入した短大生の多くが特待生になったり、優等賞とかとるんだから、ほんとに優秀だったんでしょうね。

矢代／先日短大製図室の倉庫を探したら、教室保存の図面が出てきたんですよ。小石川先生のもありますし、若井先生のも残っていました。

羽入／スゴイなぁ。今、こんな線は描けませんよね。カッコイイ。

矢代／今じゃ考えられないような手描きのレベルですよね。

小石川／短大は工業高校から来る人も多くて、図面もうまかった。まぁ、設計というより製図だよね。今でもうまいと思います。余談ですけど、私が助手の時は設計製図の図面の受付をひとりでやりました。図面をチェックしながら200人以上。

矢代／覚えています。先生がひとりでやられていたのを。

小石川／パソコンとかなかったか

ら全部手書きでね。編入の審査書類も切り貼りして、学生に順位をつけていったんです。

羽入／それは、僕も、ちょっとやりましたね。作業は夜まで延々かかる。切り貼りして、読み合わせをして、チェックして。成績ですから、クラス担任がみんな集まって、顔をつきあわせてやりました。

矢代／僕は1981年から83年まで短大生でした。その後は、理工へ編入して大学院へ行き、留学したりして、足が遠のいていました。羽入先生は最初、田所辰之助先生と同時期に助手になりました。その頃は、どんな雰囲気でしたか。

羽入／1997年に助手になりました。実は赴任する前から、短大にはいいイメージをもっていました。僕自身は理工の建築から大学院まで進んだんですけど、その大学院で研究チームを組むので、４年生を組織するんですね。取り組む姿勢がいいなって思う人がいると、この研究チームに入るようスカウトする。そうすると、その中で半分くらいは短大出身者なんです。知っていて選んだわけじゃない。１年間すごくがんばってくれたのが短大出身の人だった。毎年そうだった。そういうイメージがありましたから、短大に赴任する時には、そういう人たちともう一度触れ合えると、楽しみでした。

時代に翻弄された組織としての短大

Hanyu Toshiki
1965年新潟県生まれ。88年日大理工学部建築学科卒業。94年同大学院理工学研究科博士後期課程建築学専攻修了。博士（工学）。民間企業の研究所を経て、97年日大短期大学部建設学科助手。2013年より教授。14～20年学科長。共著に『コンサートホールの科学 形と音のハーモニー』、『音響キーワードブック』ほか。95年日本建築学会奨励賞、06年日大理工学部学術賞、14年日本騒音制御工学会環境デザイン賞、14年日本音響学会環境音響研究賞」、19年日本建築学会賞（論文）ほか。

矢代／僕は96年から非常勤をやっていて、同じ年に田所先生が助手になっています。羽入先生は１年後でしたか。あの頃は関口克明先生も短大におられましたね。

小石川／学科長でしたね。

矢代／十何年ぶりに学校に戻ってきたら、計画系の先生は小石川先生しかいなかった。井出好昭先生は入れ替わりに定年退職されてしまった。

小石川／短大の教学組織というのは、時代に翻弄されていまして、私が在籍してからのことしかわかりませんけど、70年代半ばの教員は材料系で松井嘉孝先生、横山清先生、清水五郎先生、それから平山善吉先生、助手の岡田満先生、応用力学の金平八郎先生、助手の玉木真介先生、設計計画系で細谷隆二先生、井出先生、広瀬力先生で、私は最初、副手をしていました。その間、静岡県の三島にも短大の建築があって、三島が閉鎖した時に、三島から岡野平先生と内藤正昭先生がこちらに赴任してきた。それから、工業高校に建築科がありまして、材料系の今井昭五郎先生が来るわけです。その間、清水先生が海洋建築工学科に移籍されたり、平山先生が理工学部に移る人事異動がありましたけど、多くは来る人ばかりなんですね。そして、羽入先生、田所先生や吉野泰子先生が前後して着任される。理工学部からも下村幸男先生、中山優先生、黒木二三夫先生とか。ベテランの先生が来ること自体は、組織としていいことなんですけど、そうすると若い先生たちが、なかなか昇格できない。そんな軋轢が何年か続きました。今は、きちんとルールをつくって人事構成されていますが、あの頃はたいへん苦労した先生、挫折した先生がいたんです。短大をどうするかは、短大自身から発信しなければならない課題ではあるけど、日本大学全

1990年代中頃の習志野校舎／右下の大屋根がかけられたスポーツホールと大型構造物試験棟に挟まれているのが9号館。(出典／1994年度短大パンフレット)

体として真剣に考えてもらいたい問題でもある。でも、そんなことはなかなか話題にならないけどね。

短大は、規模が小さいから、時代や学部の都合で翻弄されてきたというのも一断面なんです。いいこともあったかもしれないけど、先生方の苦労も絶えなかった。

羽入／先ほど話したように、私にとって短大生のイメージはとてもよかった。とはいえ私自身が短大の先生方にすんなり受け入れられたわけではなかった。僕に対して「なにしにきたんだ」というような印象だった。だから「教育と研究にがんばります」と答えると、「お前のような若者が来ても、先がないよ」、「辞めるんなら今の内だ」って。それが数年続いた。でもね、根本的には、すごくいい先生方なんです。当時、そんな問題を抱えた組織とは知りませんでした。

酒句／僕が助手1年目の時に言われたのは、「酒句先生、研究にどのくらい熱意をもってます？」と聞かれて、なんでそんなことを聞くのかなと思っていました。

小石川／昔は、はっきり「短大の先生は研究する必要はない」って言われていたから、あまり真剣に研究はしていなかった。私の場合は、理工学部の近江栄先生や平山先生に声をかけてもらい、自分なりにやっていました。運がよかったのか、周囲の人たちに応援してもらって、継続できたと思っています。

矢代／酒句先生が来る前に羽入先生が着任されて、小石川先生が学科長の頃は、ちょうど冬の時代に入るんです。学生が集まらなくなって、建設学科内の土木専攻が店仕舞いしてしまう。こうした流れの中で、国の教育支援プログラムである「特色GP」の採択にチャレンジすることになる。どうやってこの冬の時代に立ち向かったのか、そして、「特色GP」でなにが変わったのでしょうか。

＊特色ＧＰ／文部科学省が2003年から始めた、大学や短期大学の特色ある優れた取り組みを支援するプロジェクト。正式名称は、「特色ある大学教育支援プログラム」で、特色ある優れた取り組み「Good Practice」を略して特色ＧＰとよぶ。取り組みの財政支援とともに、取り組みを社会全体に広く情報提供して、高等教育全体の活性化を促す目的を有している。短期大学部は、07年度に採択された。

短大冬の時代から、「特色GP」採択へ

矢代／2006年から08年くらいは、短大にとって本当にキビシイ状況でした。羽入先生とクラス担任をやっていた時は、新入生が65人しか、入ってこなかった。

酒句／入学者数、覚えています。2005年度の卒業生は110人を超えていたのに、06年度からの入学生は順に98名、65名、68名と推移していきます。新入学生がおよそ100名から60名強くらいに減った時は、「教室はこんなにガランとしてしまうのか」と、しみじみと先生方が言っていて印象的でした。

小石川／その時はなにしていいか、わからなくてね。これが一般の会社だったら営業に力を入れるでしょ。大学でも広報活動は大事なことだと思ったから、全国の付属校を廻りました。北海道から長崎・宮崎まで。それには、事務方も協力的でした。

矢代／小石川先生は、「建築」ということばにもこだわっていました。

小石川／以前からずっと「建設」ということばだったでしょ。いつか、変えなきゃダメだと考えていた。建築学科だけが変えてもダメだから、短大全体で学科名称を変えるべきと訴えた。基礎工学、応用化学の3学科全体で変更しました。

矢代／それで2012年に、建設から

「特色GP」の取り組みは、「知識伝達型」から「体験学習型」への移行をテーマに、学生が自らつくったり、経験することを主役とする科目が導入された。
上／「ものつくりワークショップ」の「竹」を使った遊具の製作風景
下／「ものつくりインターンシップ」の研修成果発表会

＊名称の変遷

1950年　日本大学短期大学工科
↓　建設科建築専攻　創設

1952年　日本大学短期大学部に変更
↓

1979年　建設科建築コースを開設
↓

1991年　建設科を建設学科に変更
↓

2012年　建設学科を建築・生活デザイン学科に変更

Sako Noriaki
1968年鹿児島県生まれ。高校卒業後、数年の就職を経て92年日大理工学部建築学科入学、96年卒業し、民間企業に就職。05年日大大学院工学研究科博士後期課程建築学専攻修了。博士（工学）。07年日大短期大学部建設学科助手。16年より教授。専門は、建築基礎工学、地盤工学。

建築・生活デザイン学科という名称に代わり、インテリア系の学びも取り入れて、一定の成果が上がっていきました。定員も少し減りましたが、学生がまた集まるようになりました。名称も大事だなと改めて認識した次第です。

小石川／女子学生も増えてきたしね。学科としては、特色をつくらなくてはいけないし、４年制への編入学も理工の建築学科だけでなく、他学科、他大学と多岐にわたっていいんじゃないかと思います。今は、編入学したいという学生が圧倒的に多いんですよね。

矢代／名称変更とともに、２年間の学びを生活デザインと建築デザイン、建築エンジニアリングの３つの専攻分野に分けて再編成した。建築学科というと、最終的に建築士という資格が目標になるけど、それだけでは金太郎飴的な教育になってしまう。それに対して違うことができること、他大学では学べないことが学べるようにできる。そういう方向性でしたよね。

小石川／考え方としてはその通り。でも、学生は編入するには、単位をとることを優先してしまうから、多様な成果をあげるには指導力が問われる。大学生と言っても、編入すると、３年の時に見える景色が違うと思うんですよ。また、違っていなければいけないですよね。短大生は、はるかに視野が広くて、建築に対する洞察力も深くあって欲しい。そういうことに特化したいと思った。それで力学の必修を外したりして、従来とは違うやり方に往年の先生方の風当たりも強かった。

酒句／建築士の資格は、以前は国交省にカリキュラム全体で受験資格を認められるかどうかの審査を受けていました。今は指定科目制度になり、受験資格を得るために個々の科目を各人が選択できるので、科目を取捨選択しやすくなったというのはあります。

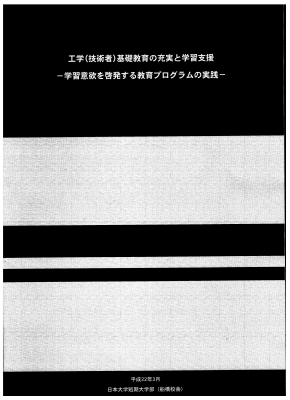
小石川／以前に一度、国交省から、そちらのカリキュラムでは二級の受験資格は得られないよと、言われたことがあるんです。だから、２年越しで国交省に通った。担当の役人がぜんぜん融通が利かない。だから一本化ではなく、資格取るならコレ、編入するんだったらコレというように、メニューをたくさん用意して、選べるようにした。

矢代／それで、ほとんど必修科目がなくなったんですよね。

酒句／最低限の科目だけですよね、必修は。

矢代／短大創立50周年の時の2000年くらいから、いろいろ変えていかないといけない状況になった。大きくは短大に土木専攻がなくなったことがきっかけなんだけど、生き残りのためにも、短大の改革に着手した。その結果、できたこととしては、文科省の「特色ＧＰ」の採択があり、建築に特化しながらも学びの幅を広げるために学科を、建設学科から建築・生活デザイン学科へと変えていった。具体的には、どんなふうに進めたんですか。

小石川／その前に2005年に短大次長になった時のことですけど、当時、総長だった小嶋先生から短大も「特色ＧＰ」をとればと、はっぱをかけられた。でもね、初めはなにをやったらいいか、わからない。３年目にやっと採択になったんだけど、２年間、いろいろな作文、書類づくりにあけくれた。教務課



2010年にまとめられた「特色ＧＰ」の成果報告書。タイトルは『工学（技術者）基礎教育の充実と学習支援　- 学習意欲を啓発する教育プログラムの実践 - 』。07年から09年までの短期大学部全体と、学科別の取り組みと成果がまとめられている

の人が一所懸命サポートしてくれて、最後は田所先生とかに応援してもらった。プレッシャーばっかりで、途中、更迭してくれと申し出た時もありました。

矢代／私が専任で入る前の年に採択されて、着任後に内容を紹介するパンフレットをつくった。この採択を受けて短大の雰囲気って変わりましたか。

小石川／総じて高評価だっただろうけど、お祭りで終わっちゃったような気もするね。でもその採択自体は、文科省に対してのアピールというより、大学内部に対する私のビジョンだった。

矢代／酒旬先生はどんな思い出がありますか。

酒旬／私はあまりわかっていなかったですね。構造系の研究室は予算がついて、1台30万円の実験機器を何台も買ってもらいました。ビッグマネーだと思っていました。その機械は授業でよく使いました。

小石川／これには後始末があって、成果をまとめた冊子をつくったり、詳細な会計報告なども全部自前でやりました。マネージメントの整理なんて、よくわからない世界なんだけど、全部で2000万円くらいもらったからね。でも金額じゃなくて、文科省からひとつの評価をもらえば、大学の評価にもつながるし、理想像かもしれないけど、こういう教育を展開して、短大としての意義とか魅力を発見するというテーマを掲げて実践したんです。

特性を活かすマインドとカリキュラム

矢代／小石川先生の後、学科長を羽入先生が引き継ぎました。

羽入／小石川先生の時代は、いろいろなところから逆風が吹いていました。少子化ですし、日大としても短大の存在意義が問われていたし、その中で小石川先生は孤軍奮闘され、学部を潰さずにわれわれにバトンタッチしてくれたんです。僕は短大に対していいイメージだったから、「よっしゃ！」と思って入ってきたけど、少し違っていた。大学の本来の目的は、若い人が将来を夢見て、学ぶことがおもしろいとか、いろいろなものを発見したりするものだと、僕は思っていたけど、ところが現実はそうじゃない。25年前、僕が着任した時に、「将来はないよ」って言われたんだから。将来を夢見られる組織じゃないと、やっぱり先はないと思うんです。そこは、先生方のマインドも大きなテーマになると思っている。変えるというのは、たいへんおこがましい言い方なんですけどね。

矢代／教員一人ひとりの問題でもあると。

羽入／理系短大というのは、ものすごく珍しいんですよ。なぜ、やっていけるかというと、この広大なキャンパスを理工学部の各学科と共有できていることが大きいポイントなんです。一方で理工学部という大きな舟の一部という現実もある。われわれ教員のマインドも、大きな舟に乗っている小さな乗組員みたいな感じになってしまう。周りもそう見ているんです。だから、若い教員がプライドをもって短大に来るのは難しい。そこが、ぼくが思ったいちばんの課題です。短大の教員のプライドと学生のプライド。それを涵養して、プライ

1967年8月竣工の9号館は、2015年に改修され、現在は建築・生活デザイン学科の研究室が集約されている

Yashiro Masaki
1961年東京都生まれ。83年日大短期大学部建設学科、85年同理工学部建築学科卒業、87年同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。デルフト工科大学留学の後、96年日大大学院理工学研究科博士後期課程建築学専攻修了。博士（工学）。非常勤講師を経て2007年同短期大学部建設学科准教授。14年より教授。20年より学科長。専門は建築歴史・意匠。

ドをもてる組織でありたい。

短大が、理工学部の一部であるということから脱却して、独自のものを見出していかなければならない。そこで、それぞれの先生にもっと交流してもらうことにしました。教員同士で、お互いの研究を知るため、少なくとも年に1度は研究発表する「懇談会」の場を設けた。お互いの研究内容を知って、お互いのスゴイところを理解する。発表、質疑応答した後、みんなで飲んで、もっと知り合う。

矢代／質疑応答では他分野の先生方から想定外の質問が飛んでくる。それが、刺激的ですごくおもしろかった。羽入先生が学科長になった時は、上の世代の人たちが次々と辞められた。下村先生、黒木先生、小石川先生と。どうやって、学科を運営していったらいいかと、しばらくはたいへんだったでしょうが、新しい風を吹き込むにはよかったんですね。それに、以前は構造系は9号館にあり、環境系は6号館で、計画系は5号館と、研究室がバラバラな棟に分散していた。それが、全員9号館に集まった。これで、風通しがよくなったのかもしれないですね。

羽入／教員の研究室を9号館に集めるのは、小石川先生にやっていただきました。9号館に集約するというプランを立てて実行した。

小石川／最後の置き土産だね。

羽入／風通しのよい環境の下地をつくってくれました。

小石川／本来は学部併設短大として、教育環境も一体化しているのですから教員も交流を定常的にやるべきです。短大から学部へ、学部から短大へと。そういう循環がまったくない。短大から学部へ行ったのは、平山先生、清水先生、田所先生だけです。来る人はいっぱいいたのにね。

酒句／建築系学科として短大と学部の交流があると、学部の先生方が短大のあるべき姿を、一緒になって考えられるようになると思うんですよね。人事交流がないと、限界がある。

小石川／教育面、研究面、教学組織面でも、対等なんだからね。

羽入／卒研もやらないで、基礎学力だけつければ、と言われたりします。もちろん学部の卒研とは、意味合いも、レベルも違います。時間的な制限もありますし。だけど、自分のテーマをもって、自分で考えてなにかを発見したり、つくったりすることを経験するか、しないかで、学生の意識はまったく違ってくる。成果ではなく、経験が大事なんです。

小石川／卒業研究は新しいカリキュラムで立ち上げたんだよね。無理やりつくった。他大学の短大で卒業研究をやっていて、学会で発表しているのを見ました。そこは工学系じゃないんだけどね。これは、やった方がいいと思ったんです。教育効果だけの話ではなく、短大からなにかを発信したり、モチベーションが生まれたら、魅力のひとつになるでしょう。それに、研究室を機能させるためにも必要。卒業研究という位置づけをちゃんとすることは、新学科発足のための目的になったんです。

羽入／手探りながらも、内容は少しずつ発展していきました。口頭発表を全員で審査していたものを、ポスターセッション形式にしたり、さらに学部の先生を招待して、一緒に見てもらう。そうすると、先

2019年1月に実施された卒業研究ポスターセッションの風景。論文系の会場

生方は、最初は怪訝そうな反応だったのが、意外とやっているねと評価してくれる。それで、編入先がそちらの学科ですと情報を出すと、そういう学生だったらと、さらに真剣に聞こうかという姿勢になる。

小石川／先生方は、よく来てくれるよね。

羽入／全員じゃないですけど、特に海洋建築の先生は同じキャンパスなので、気軽に足を運んでくれます。今はコロナでやりにくくなってしまいましたが、コロナが収まったら再開させたい。こういうことをやっていたら、海洋建築の方から逆に卒研発表を見に来てくださいって言われ、さらに編入する予定の学生も一緒に見に行くようになったんですよ。

酒句／海洋建築は3年生になると、すぐに研究室に所属しなければいけないので、すでに短大にいながら学部の先生を知るいい機会にもなります。同じキャンパスだからやりやすい。もう、恒例になっています。

矢代／そうやって交流をすると、逆に「編入生が海建の賞をとったよ」なんて、身近な情報にも触れられます。いい意味での相乗効果と言ってもいいですね。

酒句／1回、卒業研究をやっていると、その分意識が高くなるのか、大学院への進学率も高いと聞きます。だから、短大での教育って大事なんですね。

羽入／短大は、学力に相当差がある学生が入ってきます。低い方を卒業させる指導力と、高い方を伸ばす指導力の両方必要になります。留年率を下げるとか、卒業率上げろとか、上から言われるから、そちらに力を入れざるを得ないんだけど、やっぱり上を伸ばすこともやらないと未来がない。そういう意味では、やりたいことがちゃんとあって伸びる子には卒研は有意義。その仕組みを小石川先生がつくってくれました。

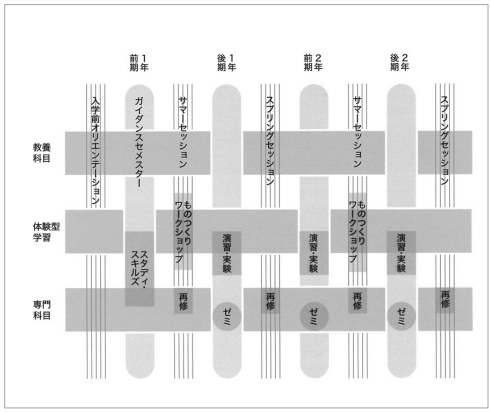
小石川／短大のいいところは、学部との比較だけど、少人数なところ。だから、学生同士で啓発し合えるんだよ。設計製図は、先生がアドバイスするよりも、学生同士、友だち同士で作品を見たり、話し合う方が教育効果が上がると思う。そういうのが教育プログラムの中にあれば、活用できる。でも今、心配なのはリモートの授業だよね。

酒句／そうなんです。今はコロナで、2年生は脱落者が増えています。いい意味での助け合いや刺激のし合いが、できなくなったとたんに、もうボロボロ。

小石川／そうですよね。想像していたんだけど、リモートだと、先生だけとの対面になってしまって、学生同士の横のつながりがなくなっちゃう。刺激したり、引っ張ったり、助言をしたり、そういうことが短大にとっては命なんだよ。コロナでたいへんだと思うんだけど、みなさんには、学生さんを失望させないで欲しいな。

2＋2＋2というステップの可能性

羽入／学生を指導して感じるのは、大きな夢をもって大学に入ってくるんだけど、ほとんどの人がその夢を実現するには、どういうステップを踏めばいいのか、考えていない。でっかい夢を実現するためには、小さなステップを積み重ねることが必要なんです。大きな夢に



「特色GP」に採択された、ファブリック型学習支援プログラムのイメージ図。キャッチフレーズは、「織物のように紡ぐ。しなやかに。」

必要な小さなステップ。そういう意味で、小さなステップを踏みやすいのが短大です。4年で一気呵成にやる学部よりも、短大でステップを刻んだことによって、大きく伸びることも可能なんじゃないかと思います。こうしたプログラムが稀にあるのではなくて、もっと一般的にあってもいいと思う。こういうプログラムで伸びる人がいることを前提として、アピールしていったらどうでしょうか。

矢代／その短大2年＋学部2年＋院2年というステップは、まさしく私がロールモデルで、それに留学の2年も加わりますが。（笑）2年をひとまとまりにすれば、2年を土台にして、次への移行が確かにやりやすい。4年間だと、どこかで中弛みをしてしまうかもしれないですね。

小石川／矢代先生なんか、急成長だよね。1年の時はパッとしなかったけど、バーンと飛躍した。

矢代／2年生の時に、おふくろが大学に呼び出されまして、目が覚めました。(笑)

小石川／なにかのきっかけで劇的に変化する学生っています。若い人って、みんなそうなの。そのチャンスは短大にあるんだよ。先生方と密な関係があったり。逆に、建築には向いていないなと感じたら、早く別の進路を探す余地もある。

羽入／まさにそうですね。やり直しがしやすい。

酒句／編入先が文系という学生も中にはいますよね。文系といっても、経済とか、商学部ですが。2年次からになるんですけど、そういう仕組みがあって、方向転換をした例もあります。

矢代／学びの場が変わることで、人脈もどんどん広がっていく。短大から、いろんな学部へ行くので、友人を通じてさまざまな情報も集まってくる。

羽入／進学先の理工学部内の学科を越えた横のつながりがいい意味でできます。それは短大から編入したから、やれることでもある。

社会状況に合わせたモデルチェンジを

矢代／少人数だから、教員との密接な関係を築けるというメリットもあるし、研究室もあるから、学生同士も早くからつながりがもてる。去年はコロナ禍だったので、編入した卒業生から、休講の間に勉強して一級建築士の試験に受かったという報告もありました。

酒句／短大を卒業していないと、できないことですね。

羽入／今、それぞれ専門の授業があって、縦のつながりになっているんだけど、横のつながりとして、構造的なこと、計画的なこと、環境的なことを、学生たちが集まって、寄ってたかって議論をしようという企画を立てていますが、これもコロナ禍でなかなか実施できていない。また、どうしてもやりたいけど、なかなかできていないのは、1年生と2年生の交流です。地域貢献のために、ものつくり＆サイエンススクールというイベントをやっています。小学生にものづくりをさせて、学生がサポートするスタイル。そうすると、ふだんは成績が振るわない学生が急にお兄さん、お姉さんになって、大人っぽくなるんですね。なので、先輩として2年生が1年生に教え

ものつくり＆サイエンススクール。ストロー・ストラクチャーの製作風景。ストローを用いて構造物を作成する。完成後に荷重をかけて丈夫さを競い合うことで、参加者全員の一体感がもてるような雰囲気もつくっている

学生と教員が一体となっている学びの断面。
上／新入生オリエンテーションでのペーパー・ストラクチャーの製作。A4コピー紙100枚を用いて、一定の時間内で、より高いタワーの建設を競う
下／ゼミナール系科目での建築見学会。２年間４学期各学期に設置されたゼミナール系科目を活用して、実物を見る機会を積極的に設けている

るような仕組みをつくれないかと、新しい科目「建築総合プロジェクト」として取組中なんです。教えることによって、自信をもつ学生を何人も見てきましたから。

矢代／去年の大学に入学した学生数と各大学の定員数を見ると、実質として全入の状況なんですよね。今後、ますます少子化は進んでいきます。去年の出生数は、なんと84万人までに減りました。今後の短大はどんなことをしていったら、よいでしょうか。

羽入／さっき話したことと関連しますが、短大の存在意義や価値をぼくら教員がしっかりと認識する必要があると思っています。そもそも日本における短大の位置づけは、短期間で職業人を育成することだった。でも、そういう社会的使命はもう十分に果たしたと思います。これからは、社会状況に合わせたモデルチェンジをすれば、新しい学びのスタイルを提案できると考えています。２年間って、ほんとにちょうどいい長さなんです。現代のハイ・スピードで、しかも流動的、多様な時代の中で、自分の人生を考えていくべき時に、教育だけが４年という枠は不自由です。しかも、偏差値で輪切りされている硬直的な高等教育の限界がある。２＋２って、これから、ますます魅力を発するのではないかと思います。それをちゃんと認識して、新しい仕組みにすればいいのではないか。新しい価値としてリニューアルし、時代に即した役割を果たすことができます。

酒句／２＋２だけでなく、学び直しの受け入れ先ということもありますよね。たとえば、お茶の水に校舎を構えられれば、社会人が働きながら通えるということにもなります。そういう学び直しの受け皿も、２年間だとやりやすい。実際に工業高校を出て働いた社会人が、入学した事例がいくつかありました。時間の短さの活用をしてもらいたい。現実的には、組織の力を発揮するのは、短大だけじゃ無理なので、人事交流が強くなければならないでしょう。短大の先生が学部の授業を担当したりして、徐々にやっていけるようになってほしいと思います。

矢代／それと、編入が半分目的化しているところもあるから、優等生になっていい成績とろうとがんばるんだけど、そうすると、ステップを踏むことにならない。

羽入／組織として、システムとして、整えることは大事なんですけど、それに加えてそこにいる教員がおもしろくないとダメだと思います。われわれ教員がおもしろいことやっていたり、生き生きとやっている姿を見れば、学生も触発されて、おもしろいことをやったり、既成概念にとらわれない人が出てくるのではないでしょうか。

小石川／私たちは常々学生諸君に目標をもちなさいと助言しますが、短大の先生方も常にビジョンをもちながら、教育・研究に励んでもらいたいと思っています。

矢代／短大ならではの学びの可能性をさらに突き詰めていく必要はありそうです。まだまだいろいろなことができそうですね。本日は長時間にわたり、ありがとうございました。